

詩時評

第36回

紛るる方無く、 ただ一人在る

松本衆司

今時評の川上明日夫詩集のくだりで小林秀雄の『徒然草』に触れた文章を引いた。小林は言う。「徒然わぶる人」は徒然を知らないやがて何かで紛れるだろうから。やがて『惑の上に酔ひ、酔の中に夢をなす』だろうから兼好は、徒然なるままに徒然草を書いたのであって、徒然わぶるままに書いたのではないのだから、書いたところで彼の心が紛れたわけではない。紛れるどころか、眼が冴えかえって、いよいよ……と、続く。詩人の姿勢もここにある。生きる時間の中で、心の襞に触れる命の声を聴くのだ。

河野俊一詩集『ストーマの朝』（土曜美術社出版販売）を読む。「その季節」を引く。

娘が息を引き取った六月三十日は／初夏にしては熱れすぎて／夏というには幼すぎる／梅雨というひとときもあるにはあるが／その週ばかりは／雨など忘れたように来る日も来る日も／夕焼けが美しかった／今年もそんな／夏の隙間としか／名づけようのない日々が近寄ってくる／毎朝まぶしい方角に出勤するので／毎日夕陽に向かって帰宅する／おとなとこどもの隙間としか／名づけようのない娘の日々を思い出せば／夕陽の大きさと／同じくらい沈黙が／たくさんのつくないを散りばめて／空を染めていく／昔のフランス映画を見た／最後まで気持ちのどこかに／昔の映画だとういう／うしろめたさのような／いいわけのようなささくれが／消えないままだった／最後のシーンでは／物思いにふける男が／ついに鳴り続ける電話に出なかった／失われた会話の夕暮れをみつめれば／娘が最後に／おとうさん／と呼びかけてくれた季節が／もとう手の届くところにやってくる

詩集のいずれの詩篇にも感想の折り目を入れた。カズオ・イシグロが文学の仕事を「私たちの目的は、この世界で生きる人間の感情、あるいは感情的な体験について伝えること。そして、読者に対し、『これはあなたの感情でもあるのでは？ 人間なら誰もが感じる普

遍的な気持ちではないですか？」と問いかけることです（『動的平衡ダイアログ』小学館新書）という。だとしても、今はただ河野俊一という詩人の心の言葉に寄り添いたい。

小勝雅夫詩集『唾問』（土曜美術社出版販売）を読む。「工序章 自伝的私的小説的3」を引く。

だが彼に出来たことといえば、焼け跡の瓦礫の上に莫塵を敷いて／その上に縁日の花火や飴玉を並べることから始まり／占領軍基地の貨車の積み下ろしや、米軍トラックタイヤの焼付修理／メートル調べ、結核療養所生活を経て／首切られた保険会社の日雇い／時に一枚幾らかの筆耕料を稼ぎ、街角に花屋を開き／私塾の教師、労働組合の書記に雇われ／ようやく町役場の吏員として、カフカのように／にんげん達に囲まれて生きるのだ／そしてそこに見てきたものは、澱んだ水の底にあって蠢いている人間たちの姿だった……／＊／だがその時、不眠の着褪めた夜を繰り返し夜空に響く旋律を俺は聴いた／———なんという蒼褪めた夜だったろう／チャイコフスキーヴァイオリン協奏曲第一楽章の／軋り泣く孤独の旋律が俺の心に飛び込んできた／その軋りは夜ごと大きく／俺の頭蓋のドーム

も割れんばかりに響き渡った／そうしてついにその響きは俺の叫びそのものとなり俺の脳裏に反響した

詩集『唾問』には、昭和六年東京市四谷区麹町に生まれた小勝雅夫の経験した「昭和」という激しく生々しい時間が刻まれている。生き抜く現実を救済する妻への愛と芸術の尊い響きを湛えながら詩は綴られてきたのだ。

橘しのぶ詩集『水栽培の猫』（思潮社）を読む。「レプリカ」を引く。

花火大会に誘われた／一度だけ、となりの席になった男子だ／ゆかたを着てきたのに／あの子はTシャツに半パン／捕虫網と虫かごまで持っている／「昆虫採集にでも行くの？」「花火泥棒だよ」／ひらきたての花火を網ですくって／同時に空に向かってなにか投げつけた／花火のレプリカがちるさまに歓声があがった／「本物ならちるはないのね」／本物の花火を虫かごにしまつて／むかついた先は中学校のプールだった／水にうかべると／花火はふうわりむわいた／あの子とわたしはプールにとびこむ／二匹のさかなになって本物をさがしに行く／わたしをかすめるあえかなぬくもりが／花びらなのか水の手のひらかあの子の尾

鱈なのか／わからなくていい／「水中花つてレプリカなのにちらないわ」／「ちらないならちらすだけさ」／「あえるあえないあえるあえないあえる……」／花びらを口に啜えてかわるがわるちらした／「恋人ごっこね」／「いや、共犯者だよ」／夏休みの最後の日／ハガキが一通、届いた／文字のかわりに押し花の花びらが／放射線状に貼りつけてあった／消印には知らない町の名前が記されている／「二期期から、あの子、転校するのさ」／わたしはくちびるをかみしめた

誰にも夢があり、出会いがあり、浪漫な心があり……、そのように幼く澄んだ思い出がある。慌ただしい時の歩みの中でそれらは皆、遠ざかって消えてゆく。だが、記憶を凍結し固定する人もいる。詩人の尊い仕事である。

川上明日夫詩集『骨霊譚』（山吹文庫）を読む。「咲いている草・そこに風景」を引く。

吹かれては と／一人ものが ここ かしこ／飛び散らう 落葉かな／を 聴いている／軽いスイングの 鼻歌で／喜怒哀楽の／ 艱難辛苦／お花畑の 上空を／で暮らして 影はありません／そう 思いません／そんな 軽さで／声 いい人格で

すから 音が見えませんが／ 在るのでしようか／人格を吹いて行けば どんな音色が鳴る／ は 不思議の合図／届いたろうか／見上げては／空の抜け殻を聴いてやるように／声のない あはれ 雲を聴いてるようで／ここ かしこ／ああ 人の抜け殻は 淋しい／ 穢れ／暗闇を 見上げては そんな想いの穂先／ に／咲くか咲かぬか／骨の空／草葉で いま 壺が泣いてますよ／みしらぬ命に／思う壺 抱きさしめられて／穢れ が／ そっと／涙壺／しがらみ 浮かべ／紙魚で／ 徒然／泣いてましたよ／／どうも私に すこし似ているようです／詩は 咲いてある草 穢れですか

後の人の思いついた『徒然草』という書名により「兼好の苦しい心が、洒落た名前の後に隠れた。一片の洒落も随分色々な物を隠す」とは、小林秀雄が『無常といふ事』の中で、『徒然草』にふれた行だ。「兼好にとつて徒然とは『紛るる方無く、ただ一人在る』幸福並びに不幸を言うのである」と続く。兼好はいよいよ「怪しうこそ物狂ほしけれ」と言ったが、それと同様の心を川上明日夫に見る。

『石の森アンソロジー2024』（ポエムKの会）には美濃千鶴、高石晴香、西岡彩乃、春

香、凜々佳（故人）、夏山なお美の詩がそれぞれ五篇ずつ。詩誌『石の森』二百号を記念したアンソロジーである。八二年に金堀則夫主宰の「交野が原」から生まれた「十代の少女たちの詩誌」も創刊から四二年。その長い道程を想う。美濃千鶴「ノイズ」を引く。

夢の中の電話はどうして／こんなに声が遠いのだろう／わたしは今 受話器越しに／あなたのすべてを受けとめている／浅い息づかいても温かな肉体も／あなたが泣いていることも／それなのにことばが／ことばだけが／わたしのもへ届かない／断続的に降り続く声は／ずっと聞こえているのに／あなたをつつむ不安が流れ込んで／わたしのからだから／あふれそうになっているのに／あなたはわたしの中で／ことばにならない／形にならない／声だけが凍らない泥のように／わたしをただ埋めていく／息苦しさをこらえながら／必死であなたが語りかけるけれど／あなたの中でわたしは／ことばになっているのだろうか／わたしがしているように／受話器から聞こえてくる／微かな声だけを握りしめて／だからあなたはさつきから／そんなに辛そうに泣いているのだろうか／夢の中の電話はどうして／こんなに声が遠いのだろう／走っていつて抱きしめたいけれど／あなたの居場所すら

／わたしにはわからない

人は支え合うことで「人」であり、二人寄り添うことで「仁」なる愛が生まれ、心が育つ。そうに違いないが、現実には様々な「ノイズ」が阻む。困難を乗り越え、素朴な愛の居場所を求め続ける詩人の姿をそこに見る。

橋本篤詩集『あした天気になあれ』（編集工房ノア）を読む。「白衣」を引く。

梶原さんは いつ回診にいつても車いすの上／若い頃は水も滴るいい男だったに違いない／生涯トラック運転手で陸送を専門にしていたという／／私はいつもの挨拶から始める／ お変わりはないですか？／／返事はなく 続く言葉も一切ない／話しかけていた間中 微笑んで／じっと私を見つめるだけである／そして いつものことだが／そろそろと手を伸ばし／私の白衣を握りしめてくる／／さて下のフロアでも 大勢の入所者が待っている／ 梶原さん お手をお離しください／／やはり いつものように いくら頼んでも／白衣から手を離してくれない／やつとこのことで 手を緩めてくれる／車いすからも見えるエレベーターに／私はゆつくり乗り込む 扉が閉まりきるまで／梶原さん 首を左右に伸ばし

て私を見おくる／／梶原さんには 大の我慢がある／隣町に住む一人息子がお医者である／ただ お父さんが入所されて三年はたつのだが／面会に来られたことは まだ一度もない

詩集には「認知症回診日録」と副題がある。医療施設の院長として医師として接する認知症患者となった人々の生き様が描かれる。高齢化する社会の中で誰もが向き合う現実である。いずれの詩も生きることの切なさや滲む。

内田るみ詩集『地に咲く花』（土曜美術社出版販売）を読む。表紙には鮮やかな紅のゆりの花が描かれている。「地に咲く」を引く。

湧き立つように／連なった花弁や／雲のよう／／柔らかな花弁が集って／咲いているのは／昔／たくさんの命が／生きていからなのだろうか／／この真夏の空の下／命を輝かせて／生きているのは／／地に咲く美しさを教えるために／戻って来たのだろうか

詩篇の末尾の註に「模擬原子爆弾投下跡地にて／昭和二十年七月二十六日、大阪市東住吉区田辺に模擬原子爆弾が投下された」とある。この模擬原爆の存在が歴史の明るみにな

つたのは平成三（一九九一）年。区のHPによると、模擬原爆四九発の一つが投下されたという。この憤るべき現実を詩人は「柔らかな花弁」に託す。世界のいずれの地に咲く花にもいのちの悲しみが宿っている、と。

磯崎寛也詩集『ビルグリム』（芸術新聞社）を読む。「熊野巡礼」を引く。

鬼の国の火の神／父に首を切られた不憫な子／流血がもたらす武運と豊穣／巡礼者は／白を食べ／白を飲む／死装束を身につけ／荒縄で体を縛り付ける／タノムデ／タノムデ／矛先の炎を／勇ましくぶつけ合う／ワツシヨイ／ワツシヨイ／二千人の上り子が我先にと／五百三十八段の石段を登る／山頂は火のダム湖／火炎の門が開き／怒りの激流が噴きだした／下り龍は記憶を失う／不利益や損害賠償は／翌日以降に繰り越される／こうして／神の山は／春節に火を放ち／家々のフォーマットを更新する／鬼がまた暴れ出す

熊野とは隠国^{カクレクニ}の意。女神イザナミが赴いた黄泉の国。この世の外の聖なる冥界。その山中他界の原始的な信仰に海上他界の補陀^{ポト}落信仰が加わり、さらに熊野修験道が重層的に入り込んで、俗塵に塗れた過去の自分をその死

の国に葬り、新しく蘇ろうとする熊野三山の信仰が出来上がった。磯崎寛也は詩人の眼で神倉神社の御神体ゴトビキ岩から松明を持った男たちが崖のような階段をかける御燈祭を描いた。いつの時代も俗塵に生きる人々は「巡礼者」となり黄泉返ろうとするのだ。

水田賢一詩集『南京虫』（濤標）を読む。「五〇円玉」を引く。

男は家を出しな／五〇円玉を一つくれた／前に来たときも一つくれた／もらう私に／五〇円は大金だった／男が帰ったあと／母は言うのだ／あのおっさん／肥え汲み屋や／汲んだあと／肥溜めに落ちとるお金を拾うんや／そやから汚いで／そのお金／ふーんと私／そのころ／今の五〇円玉とは違う／大きな五〇円玉だった／穴のない／ぎざぎざのついた五〇円玉だった

昭和二四年生まれの詩人が「ひとり息子／ひとりて育てるだけが／いきがいの／母親」（「餅屋」）との暮らしの折々の思いを書きとめた「南京虫」の章の一篇である。昭和三十年代は夢と希望に満ちた時代ではあったが、人々の生き様は現代よりもはるかに生々しく、薄汚れてもいた。そんな社会の片隅にこそ親と子の清らかな愛があった。

酒井力詩集『黒曜の瞳』（コールサック社）を読む。「霧の彼方^むに」を引く。

真夏の朝／麦藁帽子をかむった男が／霧のなから現れ 消えていく／黄金の出穂を折る眼差しで／田圃の水回りをみると／秋に向かつて 足早に／ながれる時間／その風景から いま／あなたは何を紡ごうとしているのだろう／かつては宇宙のはてまで／見通せたはずだった／あのくつきりとかがやく光を追って／眼はうつくしくまばたきもしていた／昨夜来の激しい雷雨のあと／いまは視力もおちて／耳にひびかない鼓動は／いっさい無言という静寂になった／かすかに碧い海の水平線に／指先をゆつくりと差し込むと／あなたは／そこに刺繻でも織るように／ちいさな帆船を描いてみせる／—— 舳先に「旅」の名一字を刻んで

私たちは遠い過去から遙かな未来に向かつて続く悠久の中のひとときを自らの生の時間とする。詩人はそれを「旅」といい、「帆船」とする。激動の時を知る詩人の言葉だ。